

座長のまとめ(27~29)

高橋 恒男

(岩手医大・放)

27席の伊藤ら(北大)の報告では RI-Cystography が VUR における尿逆流の病態生理に近い状態を反映し、その異常検出率も X 線による検査に劣らず、乳幼児にも容易に応用できる点などより、臨床的に高く評価されるものでこの検査法の今後の改良発展が望まれる。

28席の戸田ら(盛岡日赤)のエラスターゼ1の基礎的検討では標準曲線が安定しており、同時再現性、ロット間再現性は10%以下と良く平均回収率も98%台と良好なデータが示され、それによる健常人平均値はほぼ諸家の報告と同様だが、50歳代で有意な上昇をみることより、正常値設定の際年齢を考慮すべきと提言している。

29席の田辺ら(日本アイソトープ協会)は全国レベルでの北日本地方の各臓器検査件数の傾向を述べたが、われわれ現場の感じでは東北地方でも肝検査件数が相対的に多く、ギャップがあるように思われた。なお岩手県での RMC 建設の進行状態についても報告された。

27. RI-Cystography について

伊藤 和夫 入江 五朗 (北大・放)

南谷 正水 小柳 知彦 (北大・泌尿)

膀胱から尿管への尿逆流異常は、尿路感染症の原因となる。特に乳幼児では恒久的腎機能障害に陥いる場合があり経過観察が必要とされている。被曝線量の少ない RI-Cystography は欧米で報告されているが本邦における報告は少ない。本検査の臨床経験を中心に報告する。

【方法】経尿道的にネラトンを膀胱内に挿入し、ネラトン内に Tc-99m-スズーコロイド 1 mCi を注入後、生理食塩水を最大膀胱容量に達するまで点滴注入した。この間臥位背面にγカメラを設置し注入時スキャンを施行した。ネラント抜去後、坐位背面より排尿時スキャンを施行した。動態画像撮影は、1画像/1分の X 線フィルム記録と1画像/5秒(64×64 絵素)をコンピュータにて磁気デスクに記録した。

【結果および結語】症例は生後半年から45歳までの合計17例で VUR が臨床的に確認された。RI 検査(RI)と X 線学的検査(X)の比較では、RI(+)兼 X(+)は14尿管、RIのみ(+)は2尿管、Xのみ(+)は0、RIとXの所見が異なったのは1尿管であった。

RI-Cystography は、X-線学的検査法と比較して、VUR における尿逆流の病態生理に近い状態を反映し、また異常検出率も劣っていない結果が示された。

28. エラスターゼ1の基礎的検討

戸田 彰子 五日市典子 鈴木美千子

鈴木 俊彦 (盛岡赤十字・放)

血中エラスターゼ1は、血清アミラーゼに比べて膵疾患に対する特異性が高いといわれている。

今回われわれはダイナボット社製エラスターゼ1リアキットを用いて基礎的検討を行った。測定内誤差は変動係数4.5~8.6%、測定間誤差は変動係数5.4~9.9%とそれぞれ良好な結果が得られた。回収試験は88~124%、希釈試験では良好な直線が得られた。

健常人118例の平均は、247 ng/dl であった。男性55例と女性63例の平均値を比較すると、男性263 ng/dl、女性235 ng/dl で有意の差があった。(P<0.05) 年齢別に平均値を比較すると、20才歳で235 ng/dl、30歳代で236 ng/dl であるが、50歳代では283 ng/dl となり有意の差があった。(p<0.01) 正常値設定の際は、年齢を考慮すべきではないかと思われる。

29. 北日本地方における in vivo 検査の実施状況

—ICPM コード利用による核医学診療実態調査報告—

田辺 憲治 中島 智能

(日本アイソトープ協会)

木下 文雄 (都立大久保病院・放)

佐々木康人 (東邦大大森病院・放)

日本アイソトープ協会医学薬学部核医学用語分類専門委員会で実施したアンケート調査に基づいて、北日本地方の in vivo 検査の実態を報告した。対象施設159か所、回答142か所で回収率89.3% (使用金額から見た回収率92.1%) であった。各地方別に検討したところ、北海道地方で心・肝臓の検査が全国に比べて比率が高く、甲状腺が低い。東北地方では全く逆に甲状腺検査の比率が高く、心臓が低い。新潟県では肝臓の検査比率が高く、腎臓が低い。また北海道地方では、人口比に対し in vivo 検査施設数、検査件数の比率が他の地方に比べて目立って高かった。